

亀井好恵著

『女相撲民俗誌——越境する芸能』

慶友社、2012年、4,800円＋税、297頁

萩原卓也

本書は、女性が相撲やプロレスをするという行為をまなざす側に注目する。「本来ならば男性が行うとされる相撲・プロレスを女性演者が行う点で本質的に越境性をもつ」（11頁：以下、本書からの引用は頁数のみ記す）と、著者は女相撲・女子プロレスという民俗文化に越境性を設定する。この越境性に対し人々はどのような反応を示すのか。まなざす側の受容の基準や反発の仕方を軸に分析することで、その背景にある「モノの見方・考え方を形成する伝承的な意識やその変化のありよう」（11）を明らかにすることが著者の狙いである。

女相撲、女子プロレスに共通しているのは、多くの観客を前にしてその存在を意識しながら行うものであり、「芸能的、演劇的、カーニヴァル的な側面」（16）をもつという点である。本書で取り上げられる女相撲は、明治期以降に巡業を行っていた興行女相撲、江戸期の見世物女相撲、雨乞女相撲、さらに祝賀会・祭り・敬老会などのイベントの余興として、また奉納舞として行われる女の草相撲と、多岐にわたる。女相撲は相撲取組だけでなく、土俵入り、力芸、相撲甚句に合わせて踊る手踊りも含めて構成される。そして、小さい子どもを含めた地域の老若男女が楽しめる大衆娯楽として親しまれてきた。本書は、著者が女相撲の伝承される地を実際に自分の足で歩きながら、その土地で出会った人々との出会いのなかで書き上げた産物である。本書をとおして著者は、人々が女相撲と聞いて想像してしまう偏ったイメージ、さらには民俗学における女相撲への偏った分析の枠組みをも解体していく。

本書は、本論9章に序章と終章を加えた全11章と、補遺から構成される。うち7章分は既に論文としてそれぞれ発表されたものが下地になっている。本書のもとになっているのは著者の博士論文であり、そこに加筆・訂正を加えたものが本書である。以下に、各章の概要をみていく。

序章 研究の目的と研究史

第1章 明治以降の興行女相撲

- 第2章 女相撲の観客論——明治以降の新聞・雑誌記事からみる観客反応を中心に
- 第3章 雨乞女相撲についての一考察——信仰と娯楽のあわいに在るもの
- 第4章 都市周辺漁村における女性の民俗芸能
- 第5章 各地に伝承される女相撲の諸相
- 第6章 「隠れた」女の大力信仰——江戸期見世物文化と女相撲
- 第7章 女子プロレス抑圧者としての力道山
- 第8章 「観客論覚書」再考
- 第9章 観客から演者への投企
- 終章 本書のまとめと今後の課題
- 補遺 女相撲への憧憬

序章「研究の目的と研究史」では、本書の主題である越境という概念を検討するとともに、女相撲・女子プロレスを考える際に注目する越境性、都市性、観客論という3つの観点を抽出し、本書で拠り所とする分析の枠組みを示している。

著者は越境を、「社会的な規範を越えるあるいは逆転する営為やあり方という意味で広く」(11) 捉えている。そして、越境的なるものに出くわしたときのまなざす側の受容の違いを明確にするために、「象徴的逆転」「境界侵犯」「アンドロジェニー」(11) という用語も越境を補足する語として用いることを説明する。次に著者は、象徴的逆転や境界侵犯といった越境的なものと社会の関係を論じてきたヴィクター・ターナー、山口昌男、ピーター・ストリブラスとアロン・ホワイトなどの先行研究を参照する。そこから、劣位者・逸脱者・周縁者による秩序の逆転は、社会の中心にとっては秩序を定義・形成・活性化させる構造論的な仕掛けであることや、社会の中心的な規範によって排除・差別された対象は同時に、「制度や概念の刷新のため、舞い戻ってくる」(25) という「挑発性」(25) を併せもつことを確認する。

続いて著者は、阿国歌舞伎の出現を例にとり、女相撲・女子プロレスにも都市文化を体現する側面を見出す。著者は都市民俗研究の核のひとつとなっている都市祭礼研究に着目し、受け手側の既存の習俗と新しい文化事業がどのように影響を与えあい、土地に根付いていったのかという動態的な過程を考察した事例を参考に、女相撲の地方への定着の過程を検討していくことを確認する。

観客論においては、越境的行為が行われたその場に実際居合わせた観客のみならず、そういった場から形成されたイメージを消費する人々も観客の範疇に含まれることが確認される。そして、女相撲・女子プロレスに対する観客の反応を的確に把握するために、「ブルジョアの主体」「民衆社会的主体」「近世都市的主体」「女性主体」(21) という4つの主体を想定し、観客の受容の在り方に迫ることが提言される。

第1章「明治以降の興行女相撲」では、実際に著者がこの地に足を運んで実施した興行関係者からの聞き取りと史料をもとに、明治中期から昭和30年代前半まで、約80年ものあいだ続いた東北地方の興行女相撲を取り上げる。

山形県天童市高籾が明治以降の興行女相撲の発祥地である。その発生には、東北地方の

興行界において多大な影響力をもつ興行師が活躍するような大きな祭礼が高揃にはあり、かつ高揃は彼らの本拠地であることから都会の文化が流入してくるといふ都市性を有していたことが影響していた。3つの興行団体が存在したが、それらは独立に発生したのではなく、姻戚関係や身内の関係を基盤として派生したものであった。その広がりも力士についても同様であり、女相撲興行は親族・姻族・身内の関係によって営まれていた商売であった。興行の内容は、イッチャナ節に合わせて土俵上で手踊りを踊る女相撲甚句、米俵を歯の力だけで持ち上げるなどの力芸の披露、相撲取組である。

巡業地は全国各地に広がっており、ハワイや台湾といった海外に赴くこともあったという。著者は、東北地方の定期的な巡業ルートおよび報告書等の情報から特定した興行場所と、興行女相撲に触発されて地元の女性が女の草相撲を始めたと伝承されている場所を地図上で比較する。すると、興行女相撲の巡業地と女の草相撲の地域的な重なりが認められた。

第2章「女相撲の観客論——明治以降の新聞・雑誌記事からみる観客反応を中心に」では、女性が相撲をとるといふ越境的な行為への世間のまなざしの変遷を3つの時期に分け、まなざしの背後にあるそれぞれの時代の思想を当時の新聞・雑誌記事から分析している。

明治期においては、当時の新聞・雑誌記事の多くは興行女相撲を醜悪な見世物と批判的な論調で捉えている。その背景には、それまでの日本における民衆社会的主体に代わるものとして、近代西洋のブルジョア的主体を新たに確立しようと目論む明治政府主導による興行の規制や風俗改良政策といった民衆教化の動きがあった。

大正から昭和期において女相撲は、「時代遅れであわれな見世物」(69)、また「変態的挑情的な見世物」(69)として捉えられていく。これには、明治以降に取り入れられた性科学の知識の影響も考えられるという。著者はストリプラスとホワイトの考察を引用し、ブルジョアの主体が自己の確立のために女相撲をグロテスクなものとして嫌悪し排除する一方で、それはその主体にとって「ノスタルジアと情懐と魅惑の対象」(71)として舞い戻ってきてしまうことを指摘する。民衆社会的主体にとって、当時海外にも巡業に行くほど人気が高かった女相撲であるが、ブルジョア的主体の影響力は大きく、徐々に醜体という感覚が民衆にも浸透していくことになった。

戦後、女相撲は経営不振に陥っていく。それにもかかわらず一部の熱狂的なマニアのあいだで持続した女相撲へのまなざしを、『奇譚クラブ』という雑誌に掲載された記事・イラスト・小説など計158点から著者は読み解いている。そのなかで著者は、投稿者が素人女性の相撲取組に日常から離れた闘う女性の美しさ、野性的な美しさを認め称賛していることに着目する。しかし、そのような彼らの態度も醜体や変態といった観念を歴史的にその根底に置いているために、ねじれた性欲の表現に過ぎないと著者は解説する。

第3章「雨乞女相撲についての一考察——信仰と娯楽のあわいに在るもの」では、前章までの興行相撲や草相撲とは異なり、雨乞習俗のひとつである雨乞女相撲を取り上げる。従来の民俗学研究で報告されてきた雨乞女相撲の事例では、女性のケガレ観による境界侵犯や、女性に宿る霊的な力に注目する形でこの習俗は解釈されることが多かった。そこで著者は、実際に地域社会の人々に話を聞くなかで得られた言説から、雨乞女相撲という行

為がその地域社会、またそれを実際に行う女性たち（民衆社会的主体）にとってもつ意味を再考する。そこで明らかになったのは、相撲は男がとるものという自然な流れに、女が相撲をとるといふ「逆さ事」（112）を行うことで、日照り続きという自然の流れを覆そうとする、農民の象徴的営為であった。つまり、女という存在自体に靈的な力を認めているのではなく、女性の越境的な行為（象徴的逆転）が靈力を発現させているという、「自然と人とが織り成すバランスをもととした農の思考とも言うべき象徴的逆転の思考」（114）である。また、当事者である女衆にとって、雨乞の共同祈願という大義を盾に男衆を排除して行われる女相撲は、娯楽の一面も有することが明らかになった。

第4章「都市周辺漁村における女性の民俗芸能」では、興行女相撲に影響を受けて始められた民間の女相撲に注目し、越境的な女相撲を受け入れた土台を、外部からの刺激と女性の社会的な横のつながりから考察している。長崎県長崎市式見町では、複数の自治会で構成される「郷」ごとに、それぞれ民俗芸能をもっている。女性演者を前面に出す芸能が多く、なかでも女性を中心とする民俗芸能は漁村部に多い。本章で取り上げるのは下郷の女角力である。いまでも順番が回ってくると、郷ごとに乙宮神社の例祭「式見くんち」に奉納するが、そもそもの始まりは祝賀会等の地域のイベントへの余興芸としての出し物であった。長崎という隣接する都市部における芸能に対する意識の高まりを外部の刺激として受けたこと、それが式見における芸能熱の下地にあることを著者は指摘する。

明治期における女角力のそもそもの始まりは、外部から巡業のためにやってきた、都市性をもつ興行女相撲の伝播に起因する。その後、戦時中はいったん中断されるものの、戦後にまた復活する。その復活の社会的背景を、著者は女性社会の横のつながりに注目することで説明する。イワシ漁が盛んであった当時、女たちはちくわカマボコの製造と販売を行っており、家計にとって重要な賃金を稼ぐ労働の担い手であった。また、漁に出る男衆が留守のあいだに集落を守るため、女性による自警消防団が結成された。このように、女性が経済的基盤や社会的紐帯を保持していたことが、女性主体の芸能が再び形成されたおもな要因であったと著者は推測する。

第5章「各地に伝承される女相撲の諸相」では、女相撲としてこれまで各所で報告されてきたものを地域ごと、および内容ごとに整理している。各地に残る女の草相撲を整理してみると、女相撲には信仰と関連する儀礼的な側面は薄く、それよりも芸能といった余興的な側面が強いことがわかる。なかでも、女相撲甚句に合わせて土俵の周りを踊る手踊りは多くの地域で継承、もしくは復活される動きがみられた。また、女相撲はおもに東北地方と九州地方に集中して分布している傾向が明らかになった。この理由として著者は、第1章で取り上げた女相撲興行の巡業が与えた影響をあげる。特に東北地方においては、巡業に訪れた女力士に感化されて、地元の女性が（女相撲甚句に合わせた手踊りを中心とした）相撲を始めたという語り認められた。

第6章「「隠れた」女の大力信仰——江戸期見世物文化と女相撲」では、江戸時代の見世物女相撲に焦点を当てる。女の大力信仰に関する議論を軸に、近世の都市に住む人々（近世都市的主体）が女相撲をどのように受容していたのかを、史料をもとに考察している。史料を丁寧に分析するなかで著者は、日常においては隠されている女の力が前面に現

れる越境的な状況を一目見ようと銭を払い、その越境性に驚嘆する江戸の町人の描写に着目する。さらに、女相撲や女の大力がもてはやされた社会背景として、当時の江戸では「きゃん」な、「おちゃっぴい」な町娘に対する評判が高かったことをあげ（183-184）、当時の規範的な女らしさからはみ出す越境的な女性を新たな魅力として受け入れる素地が江戸の町人のあいだにみられることを指摘する。

以上から、失われた女の大力信仰の一例として、女の霊的な力が零落した姿を近世の見世物女相撲にみた宮田登の議論は的を外していると著者は批判する。女相撲は嫌悪と魅惑（性的欲望）の対象であったブルジョア的主体とは異なり、近世都市的主体にとっては、女相撲で示される大力もグロテスク観とは無縁な形で日常的な価値や規範を逆転し、人々を感嘆させる越境性を帯びていた。

第7章「女子プロレス抑圧者としての力道山」では、女相撲から離れ女子プロレスを取り上げる。前章までは女相撲の越境性をさまざまな形で受容する主体をみてきたが、本章で著者が着目しているのは、世間には魅力的なものとして受け入れられた女子プロレスの越境性が、同じ業界である男子プロレスからは拒否されていたという点である。本章で著者は、男子プロレスの秩序（男性主体のアイデンティティ）を脅かし境界侵犯してくる存在に対して男性主体がとる態度の一例を、プロレス関係の文献資料から描き出している。

「プロレスはショー的スポーツだ」（207）という考えをもっていた力道山は、男子と比べその創成期において「スポーツの衣をまとった演芸」（207）の域を出るものでなく、ときにきわもの的なイメージが付きまっていた女子プロレスをプロレスとは認めていなかった。その影響で、初期は女子プロレスを好意的に報じていたメディアも、女子プロレスを差別し、報道を抑制していく。しかし、女子プロレスが視聴率をとれる存在であったことから、一般大衆には魅惑の対象であったことがわかる。力道山やそのまわりが女子プロレスを嫌悪したのは、「カーニヴァル的魅力」（208）および社会の秩序を破壊する象徴的な力（グロテスク性、境界侵犯性）において男子プロレスは女子プロレスに敵わないであろうことを彼らが肌で感じていたからである可能性を、著者は指摘する。

第8章『『観客論覚書』再考』では、即興性をもつ舞台芸能である女子プロレスにおいて、メッセージを出す側と受け取る側の相互的なやりとりのなかでそこに現れてくる「観客の論理」（211）に注目する。そうすることで、越境的な行為における演者によるメッセージの伝達と観客によるその受容の具体的な基準を検証することが目的である。その際、著者は2つの異なる種類のメッセージとその観客反応に着目する。

1つ目は、初めてプロレスを観ることになる観客に直接的に伝達されるメッセージである。著者は女子プロレスを初めて観る人が大半であることが予想された、1995年に朝鮮民主主義人民共和国において新日本プロレスが開催した興行（2日間で計38万人を動員）に足を運び、そのなかで提供された女子レスラーどうしの試合を観戦し、会場の様子の観察と観客への聞き取りを行った。試合開始前は女性がプロレスをすることに戸惑っていた人々が、いざ試合が始まるとレスラーのコスチュームの差異、顔面ペインティングの有無、さらにレスラーが作り上げる試合展開から善玉と悪玉の演劇的構図を取り入れ、善玉を中心に歓声と悲鳴を交えながら応援する姿がそこにはあった。ここには、嫌悪と魅惑

が入り混じったグロテスクな他者として女子プロレスを捉えるブルジョア的主体（男性主体）とは異なり、「善と悪の逆転劇」（222）に一喜一憂する民衆社会的主体の受容の在り方が認められた。

2つ目は、目の肥えた観客に向けてレスラーがマイクパフォーマンスなどをもって伝達するメッセージである。著者は約1年間にもおよぶ2つの団体間のレスラーのマイクパフォーマンスの応酬を再構成した。そこでは、演者であるレスラーそのものから呈示されるもの以外に、所属団体や興行側の意向や、試合情報などを掲載する雑誌等のメディア側の論理もメッセージのなかに混在していた。それらをもとに、観客側は積極的に展開を読み、オフ会や雑誌の記事などをおして物語を自ら再構築していく。このように、試合の場から離れてプロレスを楽しむ観客の受容の仕方を著者は浮かび上がらせた。

第9章「観客から演者への投企」では、男性からのまなざしを中心に上げてきた前章までとは異なり、女性主体による受容の基準に焦点を当てる。各地に残る女相撲の報告において、巡業で訪れた興行女相撲を観た女性たちが触発され演者へと移行していく事例が数例認められた。著者による当事者（女性主体）への聞き取りから、彼女たちは「男性的な身振りへの越境」（244）が女相撲の魅力であると認識していることがわかった。また、女力士が相撲取組の際にみせる雄々しさと、踊りのときに醸し出す女らしさという、男性性と女性性を往来する状態に魅力を感じ取っている男性の観客（民衆社会的主体）もいた。著者はこのような状況を、ジェニファー・ロバートソンが宝塚研究の中で考察した男役の「アンドロジェニー」（244）的魅力に重ねる。それは、日常におけるジェンダー規範に束縛されない在り方を、宝塚歌劇団の男役が男性ジェンダーを演じることによって生まれさせる魅力である。そして、女力士のアンドロジェニー的魅力に触発されて自らも女相撲を始めた女性たちのような女性主体には、ジェンダー・アイデンティティを変容していく力が付帯していると著者はロバートソンにならい主張する。

終章「本章のまとめと今後の課題」では、各章の要点をまとめ、今後の課題を提起している。たとえば、民衆社会的主体の受容の過程や、女性が地域のなかでジェンダー・アイデンティティを表現していくその仕方を明らかにするために、その地域に既存の習俗と女相撲はいかに折り合いをつけて根付いていったのか、またその際に女性社会におけるリーダー的な存在はどのような影響を与えたのかについて考えていく必要性が課題としてあげられている。

本書の帯には、「女相撲が伝承されてきた東北・三陸地方は、東日本大震災の津波の被害を受けた。しかし、流された写真や話が、奇しくも本書にだけ残された」と書かれている。補遺「女相撲への情景」は、津波被害によって消失されてしまった写真や、関係者が共有してきた女相撲の記憶を埋もれさせてはならないという著者の意思で加えられたものである。ここで著者は、東北、三陸地方での聞き取り調査をもとに、女相撲を大衆娯楽として受容した人々の話に寄り添い、老若男女を問わず人々を魅了する女相撲の力を描き出している。

以上が本書の概要である。これより以下では、本書に対する評価を述べたい。本書の核は、女性の存在それ自体に着目していた従来の視点から距離をとり、象徴的逆転や境界侵

犯といった越境的行為とそれをまなざす側の関係性から民俗文化を再考したことである。そうすることで、民俗学および世間において女相撲・女子プロレスへ向けられてきた先入観からそれらを解放したことが本書の一番の功績であろう。

また、現在では検証することのできない興行女相撲における具体的な演者側と観客側の相互的なやりとりを、対象こそ違えど、女子プロレスの試合において考察するなど（第8章）、読み進めていくなかで読者の抱きうる疑問に隙なく答えようとしており、一冊の本としての完成度が高い。さらに、本書は資料としての価値も有する。補遺に加え、各地に残る女相撲を整理した第5章、女相撲・女子プロレスに対する人々の声、さらには各章に収められた写真も貴重である。「民俗学は人々の生活意識を探る学問である」（20）と著者は言う。著者は調査手法について詳しく書いているわけではないが、女相撲に魅せられた人々に丁寧に耳を傾け、彼／彼女らの視点を大切にしながら分析を行っていることが隅々に見て取れた。たとえば164頁において、著者はその地域に巡業に来た興行女相撲をまねて自分たちで女相撲を始めた地元の女性たちの志向性を推察している。それには説得力があり、何か「あたたかさのようなもの」さえ（少なくとも評者には）感じられた。すなわち、著者のインフォーマントに寄り添うこの姿勢から集められ分析されたものが形になっているという点で、本書には価値があるのである。

しかし一方で、その著者の姿勢が無意識的に隠してしまった論点もあると思われる。たとえば民衆社会的主体は、女の草相撲を受け入れる。著者のいうように、そこにはアンドロジェニックの魅力や娯楽的要素、さらには、地主と小作農のあいだの関係性を良好に保つ機能（115）が認められるかもしれない。しかし、それらもおもに男衆にとっては、「都合の良いこと」であった可能性もあるのではないだろうか。男性中心の社会構造の秩序を再生産するために、女性に対し「はげ口」を限定的な場において提供するといったことである。そこではむしろ、著者のいうような女性の力の発現やジェンダー・アイデンティティの変革は、限定的かつ非論理的な空間である祝祭的な場に押し込められてしまっているという意味で、逆に制限されてしまう一面もあるのではないだろうか。

次に、本書のキーワードである越境という概念について考えたい。本書における著者の狙いは民俗文化の受容からその社会における生活意識を探ることであって、越境という概念を深めることではなかった。しかし、越境という概念を主軸としている以上、その概念についても著者の集めたデータから考察を加えてほしかった。それは著者が受容の基準としてあげた4つの主体の在り方をより深化させることにもつながるはずである。以下に、4つの点から評者なりに女相撲・女子プロレスにおける「越境」を検討する。

1点目は、越境の特性についてである。女相撲・女子プロレスが備えもつ都市的な性格以外の一面に注目してみたい。相撲もプロレスも、どちらも肉体的なコンタクトが前面に出されたシンプルな行為であり、それゆえに、人々にとっては身近なものでもある。肉体的なコンタクトをとらなわない民俗芸能・文化との差異を考えたときに、女相撲・女子プロレスの民俗文化としての特性とはいかなるものなのか。

2点目は、越境の「しやすさ」についてである。著者も指摘するように、相撲は男性が行う領域として強く信じられてきた。男性の領域に属するものをまさか女性が、という振

れ幅の大きさゆえに、ある意味では越境しやすかった、そのように突き動かされやすかった側面もあったのではないかと評者は考える。その「男性の領域に属するもの」に対する人々の意識の差異に迫るためにも、各地域で行われていた男性や子どもによる草相撲があるならば、その様子についてもより詳しく言及してほしかった。評者の生まれ育った地域にも、小学生の男女が参加する「団子相撲」と呼ばれる行事があった。隣村の行事だったので評者自身は参加していないが、男の子から女の子まで学校を早退して、神社の境内で相撲を取っていたのを覚えている。著者はその地域の生業や習俗と女相撲の関係については触れているが、女相撲が根付く基盤ともなりえる男性や子どもによる草相撲についてはさほど深く掘り下げていなかったように感じられた。

3点目は、越境する際に生じる、演者と観客のコンタクト・ゾーンにおける相互交渉についてである。「本書は観客論を主軸においた研究なので演者側への踏み込みは薄い」

(295)と著者自身も書くように、演者に対するブルジョア的主体の反応は論じられているが、それを受けた演者側の反応にはあまり触れられていない。演者内の差異や、越境した後の演者の日常生活への影響も気になるところである。演者側はまた、ひとつの主体からだけではなく、民衆社会的主体や近世都市的主体といった他の主体からも重複してまなざされていることになる。これらの点は、著者も課題において指摘していた、女性社会のリーダーの存在や、年齢別のかかわり方、女性社会の背景を考えることで、みえてくるのかもしれない。また、著者は「女相撲にはまる感覚」(295)を、インフォーマントに誘われ土俵に上がったことで実感したという。今後の研究が非常に楽しみである。

4点目は、越境と振れ幅の関係についてである。著者は、女性と男性の観客の両方が、男性性かつ女性性を振れ幅大きく身にまとう女力士に魅惑される様子を捉えていた。評者がこの観客にみたのは、越境というよりも、越境しきれていないところで動き続ける、振れ幅をもったあわいのものに魅かれる観客の姿である。それと対照的なのは、ブルジョア的主体にとっての女相撲であろう。ブルジョア的主体にとって他者である女相撲は確実に「向こう側」へ越境していて、それゆえに「こちら側」に境界侵犯してくることもできる存在である。越境してしまうと、それは他者化・固定化され、振れ幅は自然と小さくなる。このように考えてみると、民衆社会的主体、近世都市的主体、女性主体にとっては、越境しきれていない、振れ幅が大きいままあわいを往還するところに女相撲の魅力があった、ということもできるのではないだろうか。「振れ幅の大きさ」という視点を加えることで、著者が分析の抛り所とした主体それぞれの特徴が、また違った形で表れてくるのかもしれない。これは、越境的なるものに積極的にかかわることによって文化の刷新をはかる江戸の町人における近世都市的主体について著者が言及した点と近いかもしれない。